

チャ赤焼病の発生低減のための窒素施用量および防除時期						
[要約] 幼木園のチャ赤焼病は窒素施用量が少ないほど発病葉率が低下する。 成木園の防除は、 <u>発病確認時</u> と <u>春整枝 1 日後</u> の 2 回実施すると効果が高い。						
長崎県総合農林試験場・東彼杵茶業支場	専門	病虫害	対象	工芸作物	分類	指導
平成 1 2 年度 長崎県総合農林試験場東彼杵茶業支場 試験成績書						

[背景・ねらい]

チャ赤焼病は3～4月にかけて発生が多く、発生が甚だしいと落葉し、茎葉が枯死する。特に、本病は窒素多施用の幼木園で多発生し、成木園においても被害が見られ、生葉収量や茶品質を低下させる。

そこで、幼木園において窒素施用量とチャ赤焼病の発生の関係を解明する。また、成木園において薬剤の効果的な防除時期を検討する。

[成果の内容・特徴]

- 1．赤焼病の発生葉率は、窒素施用量が減少するに伴い低下する（表 1）。
- 2．赤焼病の発生葉率が低下するに従って、落葉率が減少し、茶芽の生育も良く、収量も多い（表 2）。
- 3．赤焼病防除の効果的薬剤散布時期は、2 回散布では発病確認時と春整枝 1 日後、1 回散布では、春整枝 1 日後である。一番茶の収量は、発病確認時と春整枝 1 日後の 2 回散布区で多い（表 3）。

[成果の活用面・留意点]

- 1．イミノクタジン酢酸塩・銅水和剤の登録希釈倍数は500～700倍であるが、県の基準では700倍である。

[具体的データ]

表1 窒素施用量と赤焼病の発病葉率（定植3年目、平成11年）

窒素施用量	発病葉率(%)				有意性	
	平均				対150Kg/10a	対75.0Kg/10a
37.5Kg/10a	39.6	37.8	29.8	35.8		
75.0Kg/10a	60.8	64.5	62.5	62.7		-
150.0Kg/10a	81.0	82.0	69.6	76.9	-	

注) \* 調査日：4月26日

\* 発病葉率 = 発病葉数 / 調査葉数 × 100

\* 有意性の判定は、\* :5%、\*\* :1%で有意差あり。

\* 10a当たりの年間窒素施用量は成木園に換算したものである。成木園に対して定植3年目は60%、定植4年目は80%の肥料を施用。(表2も同じ)

\* 品種は「やぶきた」である。(表2も同じ)

表2 窒素施用量と赤焼病の発病程度による一番茶の収量、摘芽調査（定植4年目、平成12年）

調査項目	窒素施用量(Kg/10a)		
	37.5	75.0	150.0
摘芽長(cm)	7.2	7.0	6.1
摘葉数(枚)	3.5	3.2	3.2
出開度(%)	49.8	42.7	41.1
落葉率(%)	21.0	38.0	61.1
収量(Kg/10a)(指数)	242.5(130.8)	185.4(100)	175.4(94.6)

注) \* 調査日：4月24日

\* 落葉率 = (1 - 古葉数 / 全葉数) × 100

\* 収量(指数)：慣行肥料75.0Kg/10a区の生葉収量を100としたときの指数。

表3 散布時期および回数と防除率、一番茶収量（平成12年）

防除時期および回数	発病葉数	防除率	収量
	(枚/m <sup>2</sup> )	(%)	(Kg/10a)(指数)
発病確認後の1回	104.6	38.5	604.0(107)
春整枝当日の1回	89.8	47.2	640.0(113)
春整枝1日後の1回	90.8	46.7	637.0(113)
発病確認後と春整枝1日後の2回	84.2	50.5	667.0(118)
無処理	170.2		565.0(100)

注) \* 発病確認：2月1日、春整枝：3月1日

\* 調査日：4月24日

\* 防除率 = (1 - 試験区発病葉数 / 無散布発病葉数) × 100

\* 有意性の判定は、無処理に対して行った。\* :5%、\*\* :1%で有意差あり。

\* 収量指数は、無処理区の収量を100としたときの指数。

\* 薬剤は、イミノクタジン酢酸塩・銅水和剤(500倍、400ℓ/10a)を散布。

\* 品種は「おくゆたか」である。

[その他]

研究課題名：茶難防除病害の総合防除

予算区分：県単

研究期間：平成12年度(平成10~12年)

研究担当者：宮田 裕次、瀧 通則、塚本 統